

## 特集Ⅱ 追悼：鑑 幹八郎先生

## 鑑幹八郎先生を偲んで

松 田 真理子

京都文教大学臨床心理学部教授

鑑幹八郎先生は 1998 年に本学に教授として着任され、長きに亘り、学部生、大学院生の教育・指導に情熱を傾けて来られました。また、2008 年～2014 年にかけて本学学長としても大学のために多大なるご尽力をしてくださいました。

鑑先生が 2021 年 5 月 7 日にすい臓がんで永眠されたことは本当に悲しく残念なこととして大きな衝撃を受けました。毎年、大学院では事例検討会を実施しており、今年も 2 月の事例検討会をオンラインで開催することになりました。事例検討会では現役生、修了生で構成されている京都文教大学心理臨床学会の総会があり、鑑先生には顧問として長年、ご尽力いただいております。事例検討会の前に鑑先生にお電話で顧問を継続してご担当いただけるかお尋ねした際に、すい臓がんで闘病中であることをお話くださり、私は初めて鑑先生の病状について知ることとなった次第です。お電話では張りのある声で 7 月には鑑先生ご自身の講演会をご予定なさっていることもお話くださり、闘病は

辛いけれども、まだまだ頑張るというお気持ちが強く伝わってきました。それだけに 5 月の急逝はとても衝撃的でした。

鑑先生の思い出を紐解くと、尽きることなくたくさんのことが溢れ出てきます。最も印象に残っているのは博士論文を指導していただいた時のやり取りです。私は博士論文のテーマを「健常者のヌミノース体験と統合失調症者のヌミノース体験の意味についての研究」とし、統合失調症者の心理療法の可能性を探索するために、統合失調症者が体験している心的世界について健常者の体験と比較検討し、焦点を当てる試みをしました。ヌミノース体験とはドイツのプロテスタント神学者である R.Otto (1917) が呈示した概念で畏怖の念を伴う宗教的体験を示します。ヌミノース体験は臨床心理学、精神医学、宗教心理学の隣接領域を跨る多面的側面からの検討が必要とされる故、私が宗教的側面からの検討にも大いに力を注ぎました。その際、鑑先生から「臨床心理学の学位論文だから宗教的側面に過剰に力点を置かないように」と助言されました。鑑先生のご懸念は十分承知した上で、宗教的側面について敢えて書き続けた私の執筆態度について「僕も自分の節を曲げない方だけれど、松田さんも曲げないね」と言われたことが印象に残っています。また、学位取得後、「これからが研究者としてのスタートだから、毎年、必ず 1 本は論文を書き続けるように」と厳命され、その言葉に添って、毎年、論文を書き続ける努力を続けてきています。





また、鐘先生は本質的にとても優しく温かい方であるのに、厳しい頑固親父のイメージを多くの人が抱いていたことに対し、私が「鐘先生は敢えて損な役割を担っておられるように見えます」と申し上げると「誰かが憎まれ役を引き受けなければ組織がうまく回らないから」と寂しそうにおっしゃった姿が深く胸に焼き付いています。一方、多くの若手教員やゼミ生達をご自宅に招き、手料理でもてなして下さったことは、鐘先生の親しみやすさや暖かいお人柄を直接知る上でとても貴重な機会であったと思います。

鐘先生は幅広い視野で夢分析やアイデンティティなどの奥深い研究を継続していらっしゃいましたが、先生のライフワークであった哲学者の森有正を軸に執筆された『森有正との対話の試み』（2019）は鐘先生から私達への生き方のメッセージとしても受け止めていきたいと思っています。

鐘先生、長い間、本当にどうもありがとうございました。これからも、いつまでも私たちのことを見守り続けていてください。どうぞよろしく願いいたします。